2022 SUMMER

ダルニー通信

vol. 90

特集

民際センターの高校支援 “HOPE奨学金” スタート

2p… HOPE 奨学金とは？
3p… 高校支援を受けた生徒からの手紙
4~5p… カンボジアの元奨学生の声
6p… ラオスの奨学生の声
7p… ベトナムの元奨学生の声
8~9p… 連載❸ 遺贈寄付について
10p… 連載❹ メコン 5 ヵ国現地スタッフ紹介
11p… 連載❹ 今は昔「民際センター物語」

HOPE奨学金（後期中等教育・高校支援）とは？

高校生への支援は、これまでタイの職業訓練校と高校、ラオス・カンボジア・ベトナム・ミャンマーに関してはダルニー奨学金で支援していた奨学生への継続支援として希望される方には個別にご案内しておりましたが、2022年春より高校支援“HOPE奨学金”として、本格的に高校支援の募集を始めました。

SDGs　質の高い教育をみんなに

2000年から2015年までのミレニアム開発目標（MDGs）の教育分野の「万人のための教育（Education for All）」では、すべての子どもたちが初等教育の全課程を修了できるようにすることを目標に、達成期限の2015年まで一定の成果がありました。2016年から2030年までの持続可能な開発目標（SDGs）の教育分野「質の高い教育をみんなに（Quality Education）」では、後期中等教育（高校など）を修了することが目標となり、民際センターもこの枠組みの中で最善を尽くすため、各国と連携しながらHOPE奨学金の体制を整え実施するに至りました。

就労には高卒必須の時代に

農村の電化とともに生活様式が変わり、小作人のみならず小規模農家も月々の現金収入が必要になり、季節的な出稼ぎ労働から家族で都市へ移住することが日常となり、不安定な日雇い労働からより良い職業を志向する時代へと変遷しました。豊富な労働人口を抱えた時代は労働集約型の産業が主流でしたが、国際競争とともに機械化、IT化など産業構造が変わり、中卒だけでは能力不足、普通高卒・技術系高卒でないと就労が難しい時代が到来しています。次世代が教育の機会を得ることができれば、両親が背負ってきた貧困の連鎖を断ち切ることができます。そのために高校支援の必要性が高まっています。

NGOたる所以、民たる所以、人と人のつながりの形成

日本の一般市民に支えられた一NGOが当該国の次世代の市民一人ひとりの教育支援に取り組む活動は、その国の次世代の子どもたちに「愛」を贈る如く、人と人のつながり、心の絆を結ぶ民際活動の真髄たる行為であり、国際協力から国際交流に繋がり、国家を超えた地球市民の意識の醸成へとつながります。

少年期から青年期になる大事な時期、奨学金を得ることで人生が変わる

高校は義務教育ではないがゆえに、財政的にゆとりのない家庭の子どもの高校進学の壁は高いと言えます。奨学金はこのような子どもの進学を後押しすることができ、人生の希望の扉を開くものとなります。正に「HOPE」奨学金です。私たちが地球市民としてこのような支援ができることは喜びとも言えます。

HOPE奨学金

- **1口36,000円で一人の生徒が高校に1年間就学できる支援です。**
- **支援対象国はメコン5ヵ国（タイ・ラオス・カンボジア・ベトナム・ミャンマー）**

詳しくは：https://www.minsai.org/HOPE

高校支援を受けた生徒からの手紙

奨学生からのメッセージ

ピヤラット・カントーンさん

奨学金をご支援いただき、どうもありがとうございました。ご支援により通うことができた高校ですが、コロナウイルスの影響でオンライン授業が増え、その間自分の将来について考えさせられました。私には自分の村からは遠く離れた、例えばタイ北部の山岳民族の子どもたちの先生になるという夢と、自分の村の発展、特に農業開発に貢献するという２つの夢がありました。考えた末、私は農学部で農業開発について学ぶことに決めました。農学部に進学することで村の発展に貢献することができ、私が得た知識を伝えるという意味で村の人たちの教師にもなれるのではと考えて、２つの夢を叶えることができると思いました。もし農学部に合格できなかった時のために、第二志望としては著しい発展を続けている世界で将来役に立つだろう情報学部（IT専攻）に願書を提出しました。最後になりましたが、私のような経済的に恵まれない子どもをこれまでご支援くださった支援者様に心より感謝しています。どうもありがとうございました。

ニヤダー・バーンチャックさん

高校1年生の時から将来のことを考えてきましたが、一番の夢は大学の卒業証書を得ることではなく、家族がより快適に暮らせるようになることです。父の仕事を手伝う時、額に流れる汗や手に残る傷跡を目にしてきました。母も毎日日雇いの仕事を一生懸命しています。両親がもっと楽な生活ができるようにしてあげたいです。そして弟妹が大学まで進学できるように教育費の援助もしたいです。

私は、ナコンパノム教育大学教育学部タイ語学科に合格することができました。何かを教えたり話したりするのが好きで、未来の希望である子どもたちを教え導き、立派に社会に出て貢献する姿を見ることができるというのは何という誇りでしょう。また、教師は公務員であり、教育学部を卒業し公務員試験に合格すれば、福利厚生により両親の医療費免除等の優遇が受けられ、家族の大きな助けになることも教師を希望した一つの理由です。これからも家族のため、自分の夢を叶えるために一生懸命に勉強します。

いただいた奨学金は私にとって大金で、様々な学用品もご支援いただき、今も大切に使わせていただいています。親戚でもない私を応援し続けてくださる方がいて、私は本当に幸せだと思います。あなたは私にとって恩人です。心より感謝しています。

＊タイでは、経済的に恵まれない中学生や高校生の奨学金制度は非常に少ないですが、大学の奨学金は国・企業・財団等からの支援もあり、授業料免除もあります。卒業後一定期間僻地で勤務するなどの条件はありますが、教師志望者は支援を受けやすい傾向があります。

カンボジアの元奨学生の声

カンボジア・コンポンチュナン県で2018年から中学校卒業までの3年間ダルニー奨学金支援を受け、現在は高校1年生になった5人の元奨学生から、感謝のメッセージが届きました。

ネウグ・サボーンさん

「父は15年前に亡くなり、私を育ててくれた母も心臓麻痺が原因で2年前に亡くなりました。今、私は高齢の祖母と暮らし、祖母は私を含め3人の孫を世話してくれています。

家の経済状況は厳しく、私は放課後になると家計の足しになるように市場へガスを届ける仕事をしていて、いつ学校へ行けなくなってしまうかと不安な思いを抱えていました。幸運なことに、学校の先生は2018年に私を奨学生に選出してくださり、EDFカンボジアを通して中学1年生から3年生までの3年間、学用品や制服などを購入するための奨学金を受け取ることができました。奨学金を受けることができなければ、退学していたかもしれません。高校卒業まで勉強を続けると決心したのは、立派な大人になって家族や地域、国の発展に貢献したいと思ったからです。私たちのような生徒が中学校を卒業できるように奨学金を寄付してくださる支援者の皆様には、心から感謝しています。

最後に、支援者の皆様のこれからの健康とご発展を心よりお祈り申し上げます。」

ノイ・レアカナさん

「子どものころに父が亡くなり、母は私たち9人の子どもと祖母の世話をずっとしてくれています。母には定職がなく、毎日お菓子を売って得たわずかな収入で生活しています。その収入では私たちの教育費を賄えるはずもなく、末っ子である私は周りの子どもたちのように学校へ行くことはできないと思っていました。

しかし2018年、私は幸運にもEDFカンボジアの奨学生に選ばれ、中学1年から3年までの3年間奨学金をもらうことができました。そのおかげで、教材や制服を買うことができたため、退学することなく中学校を卒業できました。

今では、一生懸命勉強して家族や地域社会に貢献できる大人になることが私の目標です。
私に教育の機会を与えてくださった学生団体SWITCH様には感謝してもしきれません。皆様のおかげで無事に中学校を卒業することができました。

最後に、日本の皆様のこれからのご健康とご多幸をお祈りいたします。」

ソイ・ロタナさん

「私が小さい時に父が亡くなり、母は子ども7人を1人で養うという重責を負うことになりました。母には定職がなく、スクラップを見つけて売ることでわずかな収入を得ているため、生活はとても厳しい状況です。兄姉はなんとか高校まで卒業しましたが、私と弟はいつ学校を辞めなくてはいけなくなるか、いつも不安に思っていました。

そのような時に、私は中学校1年生になった2018年から卒業まで、奨学生として奨学金を受けることができました。おかげで私は教材や制服の購入費について家族に心配をかけることなく学校生活を送ることができました。そのことは、私にとってどれほどありがたく大切で、励まされたかわかりません。ご支援くださった学生団体SWITCH様には心から感謝しています。このご恩に報いるためにも、一生懸命勉強して、家族や地域の役に立つような大人になることを誓います。

最後に、日本の皆様の健康とご多幸をお祈り申し上げます。」

リー・ミラドウさん

「両親は僕がまだ幼いころに離婚し、母は女手一つで僕と弟、そして障がいのある祖母を支えてきました。家計は厳しく、教育費を捻出することはとても難しい状況であったため僕ら兄弟は学校へ通うことはできないかもしれないと思っていました。

しかし、僕は幸運なことに奨学生として中学1年生の時から卒業までの3年間奨学金をいただくことができました。この奨学金がなければ、僕は中途退学しなければならなかったかもしれません。僕を奨学生として選抜してくれたEDFカンボジア、そして遠い国よりご支援くださった日本の支援者様には感謝してもしきれません。これからも一生懸命勉強して家族を支えていくと約束します。

皆さんもどうか健康で、これからのご多幸をお祈りしています。」

ロエム・チャンナさん

「私は現在、両親と姉、そして2人の妹と家族6人で暮らしています。父は農業に従事していましたが、病気になり現在は仕事をすることができず、母が衣料品工場で働いて家族を養っています。家計は厳しく、その日に食べるものさえ用意できない時があるため、当然教育費を出す余裕はありません。姉は中学1年生の時に学校を辞めてしまい、私と妹たちも同じようになるだろうと思っていました。

しかし、幸運にも私は中学1年生の時に奨学生に選ばれたことで、卒業までの3年間支援を受けることができました。奨学金のおかげで制服などの購入費の心配をすることなく勉強に励むことができ、中途退学という悲しい選択をせずにすみました。

私たちのような経済的に貧しい子どもたちが中学校を卒業できるようにご支援を下さった日本の皆様には、感謝してもしきれません。本当にありがとうございました。

遠いカンボジアから、皆様のこれからの健康とご多幸をお祈りしています。」

ラオスの奨学生の声

ラオス・セーコーン県で中学校卒業までの4年間、ダルニー奨学金支援を受けた奨学生から、感謝のメッセージが届きました。

ノード・カムディさん

「こんにちは。私の名前はノード・カムディです。奨学金のおかげで中学校に通い続けることができました。学用品も購入でき、両親の経済的な負担を軽減することができ、私も家族もとても助けられました。また、勉強することで地域社会や困っている人を助けたいという私の夢に一歩近づけたと思います。私の人生に素晴らしいチャンスを与えてくださったことに心から感謝しています。ご支援いただいた支援者様の健康と幸せを家族一同祈っています。」

ノード・カムディさんは2006年生まれの中学3年生の女の子です。彼女は両親と6人の兄弟姉妹と共にセーコーン県で暮らしています。家族で農業を営んでおり、米が重要な収入源ですが、その収入だけでは生活は厳しく、両親は他にも野菜を育て、鶏やアヒルを飼い、できる限り収入を増やそうとしていますが、日々の生活費や薬代などであっという間に消えていきます。母親は子どもの頃、全く教育を受けることができませんでした。また、カムディさんの6人の兄弟たちも中学校までの教育しか受けられず高校まで進学できた子どもはこれまでいません。

特に兄弟の中でも勉強が大好きなカムディさんですが、小学校を卒業する時点で中学に進学させる経済的な余裕が家にはありませんでした。しかし、よい将来のために熱心に諦めずに学ぶ娘の姿を見て、母親は週末に様々な仕事を掛け持ちしてお金を貯め、勉強を続けることができるようにしました。1日約400円の収入をできる限り節約し、学費をまかなおうと努める中、ダルニー奨学金の支援を受けることになります。

もうすぐカムディさんは中学校を卒業します。好きな科目は理科、数学、国語（ラオ語）、英語です。彼女は自分が生まれ育った故郷と国の発展に貢献できる医師になることを目指しています。カムディさんを奨学金で支えてくださった支援者様へ心からの感謝を申し上げます。中学時代に受けたこの奨学金の支援をカムディさんはいつまでも忘れることはないでしょう。

家族と共に（右から2番目がカムディさん）

ベトナムの元奨学生の声

ベトナムで2017年にダルニー奨学金支援を受けていた2人の元奨学生から、ご支援者様宛にお手紙が届きました。当時の境遇と現在の成長した様子、そしてご支援者様からのメッセージをご紹介します。

ファム・クアン・ユイさん

中学生の頃

現在のファムさん

赤石隆夫様

現在20歳になりました。中学最後の年に父と姉を亡くし、また僕のHIVへの感染と、母の病気が判明しました。70歳の祖父母に面倒をみてもらうことになり、漁師の祖父を手伝うため、僕は学校を中退しました。当時は、自分を励ましてくれる友達や先生のいる学校だけが楽しいと思える場所でしたが、学費を払うお金がありませんでした。そのような時、先生がEDFを紹介してくださり、赤石隆夫様から奨学金でサポートいただけることになりました。

ご支援のおかげで通学を再開し、高校を卒業して無事に就職することができました。現在はレストランで販売アシスタントとして働いています。自力で、病気の治療をしながら生活していくだけのお金を稼ぐことができるようになりました。EDFとご支援者様への感謝の気持ちとともに、皆様の健康とご無事をお祈りしています。

グエン・トゥアン・アインさん

赤石咲子様と、EDFの皆様へ

僕は貧しい家庭で育ちました。15歳の頃、両親は僕が漁に専念できるよう、学校を中退させたがっていました。でも僕は海を恐れていました。毎年村では嵐の時期に海水が内陸まで入り込み、波が引くと海岸に大量のがれきが残されます。漁師たちはがれきを乗り越えなければ海へ出られず、僕はそういった荒波や嵐の暗闇、がれき、そして死が恐ろしかったのです。ちょうどその頃、EDFから奨学金支援が決まり、僕は通学を続けることで、漁師として海で働くリスクを免れることができました。その後は海岸の清掃活動や植林プロジェクトなどに参加するようになりました。

中学生の頃

現在のグエンさん

ご支援のおかげで努力を諦めず、大学生になるという道を選択できました。写真には、大学の合格通知が写っています。卒業後は村へ戻り、次は自分なりの方法で海を守りたいと考えています。赤石咲子様とEDFの皆様に、心より感謝申し上げます。

赤石ご夫妻より

EDFが送ってくれたベトナムの旧奨学生からの突然の２通の手紙が、驚きと喜びを運んでくれました。冷たい雪の季節を終えようとする越後の春の日差しにも似た暖かさが、何度も綴られている感謝の言葉と共に文面から伝わってきます。夫婦で何度も読み返しました。

今、想います。私たちの彼らへのささやかな支援でした。しかし、これほどまでの勇気と力を２人に起こさせることができたこの奨学金システムの潜在力に驚かずにはいられません。２人の手元に奨学金が届くまでに何人の方々の手と想いが介在したことでしょう。２人はそのことを良く知っているようです。そして、そのことを私たちにも教えてくれた今回の手紙でした。　　赤石隆夫・咲子　（2022年3月8日）

連載3回目

遺贈寄付について ～民際センターでの事例紹介～

30年を超える事業活動を通じて、数々の相続、遺贈（遺言による寄付）、生前贈与などを受け入れた多くの実績があります。中でも相続財産のご寄付は金額の大小を問わずもっとも多くのご支援をいただいております。今回は、遺贈寄付の中から、相続財産の寄付の事例をご紹介します。

古川玲子さん　悲しみを超えて

2018年3月、長男を亡くしました。享年31歳。あまりにも突然の出来事でした。周りの方々からいただいた「彼は彼の人生を生きたのだから、逝ってしまったことは誰のせいでもないのです」「あなたはあなたの役割を果たしているのですよ」「泣いてよいのです」「気が済むようにしてよいのですよ」などの、慰めや励ましの言葉が固まった心を溶かし、現実を受け入れることを納得させてくれました。それらの言葉にどんなに助けられたかわかりません。

そして、残された保険金。振り込まれてから2年の歳月がかかってしまいましたが、長男の命をかけたものだから、生きた証しとして何か形に残したい、生きるには教育が大切。教育に関わるところで活かして欲しいと考え、寄付への一歩を踏み出しました。以前、お世話になった民際センターは、きっと寄付を喜んでくれる、大切に扱ってくれるだろうと思い事情を伏せ資料請求の電話をしたのです。丁寧に応じてくれ、送られた資料の中に見つけた「ダルニー奨学金」のパンフレット。以前に支援したことがあり、当時贈られてきた子どもたちの写真を思い出しながら懐かしさと親しみがこみ上げてきました。

その後、事務所に伺い、私の寄付に対する想いと意向を事務局の方々は、丁寧に聴き、共感し、寄付が一時のもので終わらないよう「カンボジア女子寮」と「ダルニー奨学金」の寄付計画を立ててくれました。寄付の進捗状況については、その都度報告をいただいたので、カンボジアという遠く未知の国を身近に感じ、寄付が「活かされている」と嬉しく思いました。女子寮が完成して送られてきたビデオレター、冊子（報告書）の中に生徒が書いたであろう長男の名前を見つけて嬉しくて涙がこぼれました。

辛い思いから始まった民際センターとカンボジアとのつながりですが、新たな一歩を踏み出すきっかけとなりました。本当にありがとうございます。新型コロナウイルスの感染拡大が終息し、笑顔で現地に立ち、生徒たちに会える日が来ることを心待ちにしています。

ご子息のお名前を掲げてご寮の前に並ぶ生徒たち

Aさん　亡き母の遺志を継いで

母が亡くなり、遺品を整理していると、東南アジアのかわいい子どもたちのたくさんの写真と「ダルニー奨学金」と書かれた証書を何枚も発見しました。生前に自分は教育を受けたくてもいろいろな事情で学校へ通うことができなかったと言っていたのを思い出しました。その証書に書かれていた民際センターに連絡をしました。生前に母が支援をしていた子どもたちの国や人数を教えていただき、民際センターの教育支援を通して、貧困削減、社会の発展と平和に貢献します、という理念、そしてダルニー奨学金の1対1の支援に共感し、亡き母の遺志を継いで、残してくれた母の遺産で、ダルニー奨学金を継続しています。また自身でも新たに登録をして、亡き母と一緒にダルニー奨学金により里親を続けています。

相続財産の寄付とは

ご家族などが、お亡くなりになり、故人の遺志により、それを受けた遺族が故人から相続した財産を寄付する、あるいは、相続を受けた遺族が自らのご意志で、その一部を寄付することを相続財産の寄付といいます。遺言による寄付は直接継承されるのに対して、相続財産の寄付は、法定相続人を経由して寄付が行われます。基本的に相続する財産には、基礎控除額を超える場合にその超える部分に相続税が課税されます。相続によって取得した財産を国や、地方公共団体又は特定の公益を目的とする事業を行う特定の法人などに寄付した場合や特定の公益信託の信託財産とするために支出した場合は、その寄付は相続税の対象としない特例があります。特定公益増進法人として、公益財団法人民際センターへの寄付金は、相続税の税制上の優遇措置を受けることができます。相続財産からの寄付は、相続人が財産を取得した後に手続きを行います。相続税の申告期限内（相続開始から10ヵ月以内）に現金で寄付をされた場合に非課税となります。

また、相続税の非課税措置に加え、ご自身の所得税・個人住民税の「寄付金控除」も利用できます。

相続財産の寄付の流れ

1. 故人を偲び、その遺志をどう活かすかの相談
2. 寄付後の活用を確定
3. 相続税、所得税等のご相談がある場合は、民際センター専門委員を交えて打合せ
4. 寄付額の確定
5. ご報告

相続財産の寄付のご相談はこちら
www.minsai.org/contact-izo/

連載

メコン5ヵ国 現地スタッフ紹介

Vol. 4

メコン5ヵ国にある、EDFの各国事業所。そこで働く私たちの大切な仲間であり、皆様からいただいたご支援を、心をこめて子どもたちに届ける現地スタッフを紹介しています。今回は、ラオスとベトナムから二人を紹介します。

トゥイ

私の名前はPham Thi Thuyです。トゥイと呼ばれています。趣味は料理、害獣の駆除、社会貢献活動です。EDF-Vietnam（ベトナム事業所）で働くことが決まった時、これまで学んできた専門分野（ダラット大学で社会奉仕活動とコミュニティーの発展について学び卒業）を活かせる仕事に就くことができると思い、言葉では言い表せないほどの喜びを感じました。私は現在、ベトナム北部のタイビン省を担当しています。タイビン省赤十字社の協力をいただきつつ、ダルニー奨学金の対象地域の関係者とEDFを繋ぐ懸け橋として仕事をしています。タイビン省における年間活動計画を立て、生徒の生い立ちなどの情報を収集し、奨学金の支援家庭の審査や、プロジェクトの支援物品が学校で適正に管理され、提供できているかなど透明性の検証もしています。また、EDF Japan（民際センター）に報告するための奨学生情報や写真を準備し、海外から関係者が来訪することになれば、タイビン省の政府に提出すべき書類を整えます。この仕事を通して恵まれない子どもたちと接する機会がたくさん与えられ、感動を覚える教育の現場を見ることができています。日本から支援者の方々を迎えた時の、素晴らしい思い出もたくさんあります。

フェン

私はOubonrath Oudomsinです。フェンと呼ばれています。趣味は、料理、旅行、水泳、IT教育です。2011年に日本の大学を卒業しラオスに帰国しました。当時EDF-Lao（ラオス事業所）の職員だった友人がこの仕事を紹介してくれて働き始めました。それから約12年になります。現在EDF-Laoでは、ダルニー奨学金事業、自転車や学校建設プロジェクトなどを担当しています。首都ビエンチャン生まれの私は、これまで地方に行く機会があまりなかったのですが、貧しい農村地域を訪れ、電気がない村でのホームステイや、そこに住む人々と接する中で、初めて社会貢献について考え、何ができるかを考え始めました。すべてはEDFで働くことで得た経験なので、とても感謝しています。現在2人の子どもを持つ私は、この仕事をこれからも続けていきたいと思っていますし、自分の子どもたちにも、成長と共に社会貢献に関わってもらいたいと願っています。EDF-Laoが設立された1997年当時は何もなかった村に現在は学校ができ、子どもたちに教育を受ける機会が与えられ、良い人生の選択肢が与えられているのは支援者の皆様のお陰です。永きに亘って、地域の発展と生徒たちの成長を見守ってくださっている支援者の皆様、ありがとうございます。

連載　第四回目

今は昔　民際センター物語

民際センターの設立者である理事長の秋尾晃正が、設立当初から歴史を振り返って執筆する連載。今回はタイで初めて生徒が中途退学してしまった時のお話です。

ダルニー奨学金事業開始から2年目、奨学生が中途退学し、姿を消したとタイから連絡が入りました。日本の支援者から卒業するまで支援を受ける予定の生徒でした。所在を調べたところ、バンコクのスラムにいることが判明し、スタッフと会いに行くことにしました。

退学した女生徒は、2畳ほどの雨をしのげるバラック小屋に母親と暮らしていました。タイのスタッフが母親と話している間、牧歌的な美しい田舎の風景と、雨の後のぬかるんだ汚いスラムの生活を比較し、なぜ村を捨てこのようなスラムに住まなくてはならないのか、後悔していないのかと疑問に思っていました。

その時、突然スタッフから「質問はありますか？」と聞かれ、とっさに「田舎とバンコクの生活、どちらが良いですか？」と愚問を投げかけてしまいました。田舎の方が良いに決まっていると思い、質問をしたことを後悔しましたが、予想とは裏腹な答えが返ってきました。「スラム生活の方がよっぽど良い」と。「なぜ？」と聞くと即座に「村にはペットボトル一本落ちていない。バンコクは道端に落ちているので、それをお金に代えてその日の飢えを凌げる」と答えたのです。銭も食べ物も無く、その日の飢えを凌ぐことさえできない貧困生活がその言葉に感じられました。それから今日までタイは経済発展し、昔のように娘が借金のかたに売られる時代は無くなりました。

経済発展は良いことですが負の面もあります。昔は小作人が多くいて、周りに耕す畑がありました。田植えや稲刈りは村人総出で行い、そこで米を得ることはでき、餓死することはありませんでした。しかし、近代化の波が村にも押し寄せ、現金収入が不可欠となり、農閑期に季節労働者として出稼ぎに行くことが日常となりました。水牛から農機具の時代になると、田植えや稲刈りの人手が不要となり、子どもを親に預けて都市で職を得る生活へと変わりました。しかし、97年のタイの経済危機で、職を失った親が村に戻り、仕送りで成り立っていた生活の上に食いぶちが重荷となり、日々の食に困ることとなりました。

歴史は繰り返すものです。2020年に始まったパンデミックでも同様なことが起こっています。世界的に非正規雇用労働者の解雇が続き、人の生活に必要不可欠な「食」に窮する貧困が現実となっています。自然災害の復興支援の如く、パンデミックの影響で貧困に陥り学校に通えない生徒の支援は今だからこそ、必要不可欠と強く感じています。

1 「マイ・ページ」をご利用ください

マイ・ページは、支援者様と奨学生、そして民際センターとのコミュニケーションを劇的に向上させるためのツールです。こ利用いただくことで、今までメールやお電話にて都度ご依頼をいただいていた支援者様の住所、電話番号、領収書発行先などのご登録情報の変更が、ご自身で可能になります。

また、年に2回のEDFグループからの郵送物でしか確認することができなかった支援履歴、支援状況表、奨学生写真等を、PC又はスマートフォン、タブレットから確認することができます。未登録の方は是非とも、ご活用ください。

◎ ご登録方法について
www.minsai.org/oshirase/mypage

2 ボランティアさん募集中

民際センターの活動は、多くのボランティアさんに支えられています。

募集内容は、書類封入、切手整理、データ入力、翻訳、広報資料作成等のボランティア活動があります。活動場所は、民際センター事務局やご自宅など、活動内容によって異なります。

現在、民際センターの活動についての短い動画広告を制作してくださる方を募集しています。基本的に在宅での作業となります。こ興味のある方は、民際センターまでお問い合わせください。

3 民際センターを紹介してください

皆様のブログ、SNS、ホームページなどで民際センターを紹介してください。ロゴや写真、記事の提供などは事務局へご依頼ください。

4 「支援者の声」を募集しています

皆様の声を民際センターのホームページ「支援者の声(www.minsai.org/activity/voice)」やダルニー通信などでご紹介させてください。ご支援された経緯、奨学生とのエピソードなど、文章、動画、何でも結構です。事務局までお寄せください。

事務局 Q & A

Q 忘れずに支援するためにはどのような方法がありますか？

A クレジットカードによる寄付にて自動継続による引き落としをご選択ください。

Q 友人が「ダルニー奨学金の寄付を始めてみたい」と言っています。詳しい説明を聞くことができますか？

A お電話やメールでお問い合わせください。また、事前にご連絡をいただけましたら、オンライン会議システムなどにより職員が直接ご説明いたします。

Q 終活を一緒に考えてくれますか？

A 相続による寄付、遺言書の書き方などの遺贈について、ご支援者様のご要望をお聞きしながら、専門家を交え一緒に考えさせていただきます。遺贈寄付のお悩み、ご質問にワンストップでお答えします。是非ご相談ください。

Q コロナが終息した後、支援している奨学生に会いに行くことはできますか？

A 基本的に可能ですが、各国の状況によります。訪問される場合は、必ず事前に民際センターにご連絡ください。現地事業所から各国の政府機関に申請し、許可が必要な場合があります。

Q 民際センターは、メコン5ヵ国を支援していますが、どこの国を支援して良いのかわかりません。どの国が一番支援を必要としていますか？

A 民際センターが支援しているメコン5ヵ国の農村地域などはいずれも貧しく支援を必要としています。毎年の支援状況により国毎に不足の程度が変わりますので、その都度お問い合わせください。もしくは、ご支援の際に「一番支援が必要な国」とご明記ください。

【編集後記】 民際センターでは年2回、大学生のインターンを受け入れています。期間は2週間または1ヶ月。事務局にて職場体験をしていただきます。会議への参加、議事録の作成、メコン5ヵ国の奨学生や教師から届く手紙の翻訳、電話の対応や郵送物の封入作業など、様々な面で活動に関わってもらいます。先日まで大学2年生の女子学生が来てくれていましたが、インターン終了時に、今後もボランティアとして関わりたいと申し出てくれ、とても嬉しい気持ちになりました。これからの人生に少しでも役立つ体験となっていればと願うと共に、職員一同、若い世代の方々から毎回よい刺激をもらえていることに喜びを感じています。（米）

活動をご覧いただけます

- フェイスブック：facebook.com/minsai.org
- ツイッター：twitter.com/minsaiorg
- インスタグラム：instagram.com/edf_japan

郵便振替でのご支援はこちらからお願いします

ゆうちょ銀行振替口座：00160-7-664928

◀ 表紙の写真 …笑顔を向けるミャンマーの子どもたち

▶ 「ダルニー」とは…
民際センターが奨学金を募り1対1の教育支援を始めるきっかけとなったタイの女の子の名前。

*EDF：The Education for Development Foundation、民際センターを含む各国事業所の総称名

このダルニー通信は2022 年 3 月に編集されました。

ダルニー通信90号　2022年6月1日発行　発行人：秋尾晃正

公益財団法人　民際センター
〒103-0023　東京都中央区日本橋本町2-6-13 山三ビル7F
TEL：03-6457-5782　　FAX：03-6457-5783
Eメール：info@minsai.org　ホームページ：www.minsai.org

公益財団法人
民際センター